



# 災害救助賞

## 「台風災害復旧活動」

宮崎県遊技業協同組合／株式会社西の丸

今回の受賞対象活動の中心となっているボランティアサークル「一善の会」は、宮崎・大分両県で11ホールを展開する、株式会社西の丸（以下西の丸）の全社員が自主的に参加する企業内ボランティア組織。長年にわたって様々な活動を続けてきたが、とりわけ平成17年（2005年）9月台風14号が襲来した際、被害を受けた自社店舗の復旧作業の傍ら延べ359人の社員が復旧活動に参加しており、地元から大きな評価が寄せられている。

### 県内から海外まで幅広いボランティア活動を展開

「一善の会」の結成は平成6年（1994年）。西の丸のボランティア活動は、それ以前から。募金の養護施設への寄付を始め、地元花火大会の整備・清掃、定期的な地域の清掃作業、花壇整備による緑化などが活発に行われていた。

今回評価の対象になったのは、台風被害の復旧活動だったが、他にもプールなど保育園の設備作りや学童施設への援助、一人

暮らし高齢者宅を訪問しての清掃・修繕、関連会社や社員の家族も参加した台風後の海浜清掃など、その活動内容は多岐にわたる。昨年1年間だけでも、延べ816回、1万1,208人による大規模かつ広範囲な活動が行われた。

支援対象地域も宮崎のみにとどまらず、平成10年（1998年）にはケニアで照明のない奥地の学校にソーラー発電機を贈るなどの教育支援活動を開始、平成12年（2000年）の名古屋水害では社員17人が4泊5日で救援活動に参加し、平成16年（2004年）の新潟県中越地震でも12人が10日間にわたって活動している。

こうした実績を持つ「一善の会」の地元宮崎県で、昨年9月台風14号が猛威をふるった。古川店（延岡市）では市内の五ヶ瀬川の堤防決壊で濁流が押し寄せ、駐車場からホールまで泥と流木に覆われた。古川店だけで「被害額は1億5,000万円を下らない」という被災下、西谷栄一社長は、店舗復旧と並行して県内7地域へ延べ359人の社員を復旧作業に派遣したのである。

その行動力を支えるのが、作業に使う資材や工具はもちろん、

## 地域からの厚い信頼は、恩返しのために できることはなんでも させていただいてきた成果

大型トラック3台、大型水タンク車、小型ダンプ1台を有する機材の充実ぶり。本社そばの保管倉庫は建設会社並みである。

### 参加しやすい活動から始め、 やりがいを感じられるように工夫

活動歴も長いので、社員の手際も見事。まず先遣隊が下見に赴く。ホールの早番と遅番の引き継ぎが行われる午後4時30分までに先遣隊が全社員に連絡。地元なら翌朝6時に150人以上集まることも可能な動員力、機動力である。

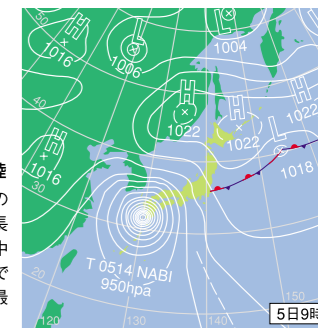
支援対象は主に、町の援助からとり残された過疎地の高齢者や少人数の家族。「明日、大勢連れて加勢にくるからね」との先遣隊の言葉に、被災者が「きっと来てね」と両手を合わせることもあったという。汚水や泥にまみれた家財道具や商店の商品を泥だらけになりながら運び出し、泥落としの放水を浴びて被災者たちとともに必死に作業するのは過酷そのもの。以前参加した社員の

中には、血尿が出た者もいたという。それでも「神様が助けに来てくれた」という感謝の言葉に疲れも忘れ、辛い作業を続ける。

「手伝った家の奥さんが涙ながらに言った『ありがとうございました』は、一生忘れられない」という社員の感想が、すべてを物語る。同社によれば、活動を通して地域との交流を肌で感じることに生きがいを感じた社員が全体の9割を超えるという。

全社あげての活動を西谷社長は「ボランティアや社会貢献のためという発想はない」と言い切る。

目的はあくまで、社員とその家族に人と社会、自然への感謝と報恩の心を浸透させること。そのためベースとなるのが花壇作りをはじめとする美化活動である。週1回短時間で参加できる活動にし、社長自身はもとより役員や店長が率先して参加。常日頃から地域の人や自然に感謝する講話をし、報道記事や感謝状の掲示・個人表彰など若い社員にも一般の反応がリアルに感じられるようにする工夫がなされてきた。まさに『感謝』と『報恩』の精神が、豊かな果実として実を結んだのである。



6日(火)台風14号長崎県に上陸  
大型で強い台風第14号、九州の西海上を比較的ゆっくり北上、長崎県諫早市付近に上陸。九州中心に大雨、強風。愛媛県西条市で757mm/日。鹿児島県種子島で最大瞬間風速59.2m/s。



猛威をふるった台風14号



33名の社員が参加した北方町曾木地区（宮崎県延岡市）での復旧活動



動員力・機動力で災害に即応



活動のため自前の機材も保有。



住民の感謝の言葉を励みに復旧作業に打ち込む。



保育園のプール作りなど、災害復旧以外にも地域に貢献する。



## 計り知れないご恩を、社員に助けてもらって 一緒にお返りする。それが始まりです。

株式会社 西の丸 西谷栄一社長

「一善の会」の活動の中心となっているのが、社長の西谷栄一氏。社を挙げて活動を行うようになったのは、当然理由がある。

「私は今でこそ11店舗あるチェーンをやらせていただいておりますが、順風満帆にここまで来たものではありません。何度も困難に直面しましたが、どうした訳か、大変な時にはいつも影響力のある方が現れて助けてくださった。そのおかげでこうしていただける。そのご恩は計り知れません。それを少しでも返させていただこう、しかし私1人ではとても負いきれないから社員にも助けてもらって一緒にお返ししよう、その気持ちが始まりです」

幅広い活動はすべて「やれると思ったことは手当たりしだいにやった」結果だと言う。地域の花火大会の片づけが「時間があつたら店の周りもキレイにしようか」と地域の清掃活動へ。台風の後、浜辺にまでその範囲を広げた。それが評判となって「手伝って」と依頼されるようになり、本格化していった。

「最近では、1人暮らしのお年寄りのお宅を清掃させていただくことが多いですね。体が不自由になると、いろんな面で行き届かないでしょう。『洗濯機が壊れちゃったんだけど、どうしていいかわからない』なんてご相談をいただくこともあるんですよ。もちろん、伺います。シロアリに喰い尽くされて、床がボロボロのお宅もあり、そこには、出入りの大工さんに来てもらって工事をしました。それまで長年暮らした家に住みたいというお気持ちはわかりますから」

活動は、社員にもいい結果をもたらしている。災害地などでの救援活動を体験して日常生活がいかに幸せであるかに気づき、それが親や家族・友人を大切に、不平・不満におぼれることなく何事もプラス思考に結び付く。お客様に感謝し優しく接する社員にはファンが増えて業績にもつながり、「ボランティアに関心の高い会社だから」と優秀な社員が集まってくる。西谷社長の言う「謙虚さ」故の結果である。

### 「一善の会」信条

#### その一

謙虚な姿勢が感謝の心を生む  
会社が今日あるのは、お客様をはじめ関係者や地域社会のおかげ

#### その二

恩を受けっぱなしではいけない。  
恩を返す行動をとる

#### その三

当然のことを「させていただく」  
気持ちで自分達が日頃受けた恩を、自分達が返せる形で返す



西谷社長は「ボランティアで人や自然に優しい社員が育つ」と語る。活動は日々の接客にも好影響をもたらす。

## 災害救助賞

—選考理由—



社会貢献活動審査委員会 委員 磯 敬夫氏

自分たちの生活にもいつ起こるかわからない台風・地震等の災害さえ、ニュースの向こうの出来事として茶の間で座したまま見過ごしてしまいがちな現代、自己被害を犠牲にしてでも災害現場に急行、店主・社員一丸となって汗を流し実践する。今回宮崎県推薦の平成17年(2005年)9月の台風14号被害に対する取り組みは優れた社会貢献事業として高い評価を得ました。

また、人と社会・自然への感謝と報恩、当たり前のことを「させていただく」という主催者の「言うは易し、行うは難し」の活動姿勢に、しかも長年継続実践する姿にも深い感銘を覚えます。地域の住民や被災地からの心からのあふれる感謝の気持ちを糧に、今後とも活動を展開していかれることを期待しています。